

高松藩寺社奉行間宮九郎左衛門

は、この噂を耳にし調査に訪れた。

別当は、問題を重大視する

高松藩寺社奉行を納得させるため、

「社人の加持祈祷おかまいなし」

を約束し、権太夫の謹慎を解いた。

その返礼として松太夫は三右衛門

の考案した大木札を売る権利を

金光院にゆだねたので、事件は一応

円満に解決したかに見えたが、

修験者たちは憤懣やるかたなく、

全員が連判のうえ、

「松太夫一族の窮民を煽動致すを、

そのままに捨ておけば、やがて当山

の一大事となります、早急に」

英断ありたし」

と別当に迫った。別当は雨傘

連判状の血判にうろたえて、

「当山の平和のために善処せよ」

と表役所に命じた。表役人と

修験者たちは結託して「参詣遠慮」

の高札を金光院前に建てたのであ

る。

すなわち

これより上は、其の筋の命により、

左の者の参詣不叶。

親の忌引（百九十日、出家は

半服）

新膚（五十日）

妊者（婦は五月過ては参詣

不叶）

（男は七月過ては参詣

不叶）

鹿を射し者（七十五日参詣不叶）

猪を射し者（七日参詣不叶）

狸を射し者（一昼夜参詣不叶）

赤腹（下痢）（三十日参詣不叶）

う犯（三日参詣不叶）

病める者（病いゆるまで参詣不叶）

金光院別当花押

松太夫一族の仕える三十番神社

は、金光院の上であり、大権現の

本殿と並立していたので、この高札

によつて、急に参詣人が少くなつ

た。

その反対に、金光院より下にある

寺院への参詣人は急に多くなった。

それを待ちかねていたかのよう

に、寺僧、修験者たちは、総出で加持

祈祷を始め、権太夫と同じ薬を与

え始めたのである。

更に、松太夫一族に、追い討ちを

かけるように、

「権太夫の薬は、祖谷のまむし酒

で、あんなものを飲んだら四つ足に

なるそうなる」

「権太夫の加持祈祷は妖術じゃそ

うな」

等々、悪意ある噂のため、権太夫

たちに祈祷を依頼する者の足は、

次第に遠のいた。

一方、修験者や寺僧は、別当の

援助に力を得て、社人に代り、神楽

を舞うて、その上がり銭まで取り始

めた。

「参詣遠慮」の影響で、三十番

神社の参詣人もとだえがちになり、

収入が急減すると、社人たちは

ひとりさ、ふたりさ、残ったの

松太夫の一族だけとなった。

松太夫は立腹する権太夫をなだめた。

「

信仰心があって、社人になったの

でなく、生活のために社人をしてい

ただから、去った者をとがめる

な」

「わしの薬作りの秘法を盗んで、

修験者側に寝返り、金もうけをして

いる人非人を放っておけというの

か」

「功德となるなら、それでもよいで

はないか」

松太夫は、物事を荒立てぬように

と気を使ったが、年若い内記はいき

りたつた。

「参詣遠慮について、父上に一言の

相談もないとは別当殿といえ越権

ですぞ」

「参詣遠慮は三十番神社のため

なく、金毘羅大権現の神域整理のた

めなのだ、文句を申すな。」

「いいえ、参詣遠慮はわれら社人を

圧迫するためです」

「内記、当山内で争を起せば、わ

れら一族無事ですまぬぞ、寺僧の

社人に対する圧迫は今始まったこ

とではない。徳川幕府はキリスト 3

教弾圧のため、仏教を保護して

寺院に本末制度と檀家制度を厳守

させているのだ、仏教が栄えるの

は当然だ。国の方針にさからつては

ならぬ。人間が生きているということは

耐えることぞ。耐えねば生きて行け

ぬぞ」

松太夫は懸命になだめたが、内記

も権太夫も納得せず、三右衛門やそ

の忤を集めて相談している時、

内記の門弟、奥田武一郎の父である、

高松藩目付奥田大膳が内記を訪れ

て、

「このたび、わが藩公が京都の滋野

井中納言殿を案内して、大榎、小榎

の鱒網を見物される由にて、某

接待役を命ぜられました、生来の

粗忽者ゆえ、出迎え、その他につい

てお知恵を拝借致したい。」

と申出たのである。

滋野井中納言は、内記の師大西

丹後の歌仲間、内記もその人柄を

よく知っていたので思いつくまま

に、中納言の好物などを教え、

「要するに、真心をもつておもてな

しなさればよいのです」

といい添えた。

数日後、奥田大膳が訪れて

「無事に大役を果たすことができ

ました。藩公からも、ねぎらいの

言葉を賜わり、面目を施しました。

ついてはお礼のしるしまでに。」

と、初漁の鱒とお神酒をさし出し

たので、権太夫もまじえて酒宴と

なった。

五条八幡の境内には、一かかえも

ある桜の大樹があり、折から満開

であった。

「桜花を眺めての酒宴とは、また

風流な」

奥田大膳は相好を崩して喜んだ。

酒好きの権太夫は飲むと冗舌にな

つて、

「金毘羅の表役人は田舎者揃いで、

「全く話が分り申さんわ」

日頃の憤懣を、この時とばかりぶ

ちまけると、酒豪の大膳は眼を細め、

ちびり、ちびりと盃を干しながら、

「さようなこともござるまい」

しきりに権太夫をなだめた。

酒に強い内記は、あびるように飲

んでも平然として、

「こう申しては失礼ながら、幕府の

巡見使殿は好人揃いでございます

なあ、金毘羅の社領に浪人御座な

く候、飢人も御座なく、酌取女、

飯盛女もこれなく、という文句に

だまされてお帰りなされた由なれ

ど、現実の金毘羅は旅人の街として

女郎屋も多く、歓楽地として、賑や

かでござるわ……もつとも、裏の手

でもてなされ、口をつぐんでお帰り

なされたのかも知れませぬが あ

は……」

と笑いながら、皮肉をいうと、

奥田大膳は、

「まあ、そう固いこと申されるな、

男が旅で一番欲しいものは酒と

女、宮詣りや寺もうでは口実にす

ぎぬ、金毘羅は旅人で栄えている

街、野暮なこと申されるな」

「しかし、奥田殿、遊女の宿固く

禁止、相背けば重罪と、高松藩で

も取締っておられるが」

内記はむきになって開き直ると、

大膳は、

「いや参った。そう筋を通されると

一言もござらぬ、某、酒に酔うと

つい本音を吐く癖がござってな…

あは……」

陽気に笑ってごまかすのを見て、

権太夫は、

「奥田殿、某も酒を飲むと、本音

を吐く癖がござってな、まあ酒の

肴と思ってお聞きください」

(一) わが金毘羅大権現では、神社

の疲弊を招く「参詣遠慮」を、われ

ら社人には一言の相談もなく建て

たので、三十番神社はさびれる

一方でござる。

(二) 神域に隣接した賭博場へ、

寺僧や修験者、表役人までが、し

きりに出入して、風紀は乱れる一方

でござる。

(三) 勘定奉行は御用立金とか申

して、公金を京の公家や、公卿に

高利で貸付けて、利子をかせいでお

ります。

(四) 表役人は縁者を寺僧に採用

するので、寺僧の臆次は守られず、

更に別当ゆかりの者に、商人株を

持たせ、世襲専売にて商をさせる

ので、金毘羅領の諸物価は高騰し、

領民は生活が苦しく、

別当も三百石で足らずんば

飽鉢もって托鉢をせよ。

魚問屋、芸妓、女郎の運上のこ

と。

三太夫、あんまのような名をつけ

て上はそのまま下ばかりもむ。

こんな落書が。金光院の白壁に、

消しても消しても書かれるありさ

までござる。